ふき出される煙の雄大さにおどろいたケサは、

「そうだ、あの山のように、大きな心をもたなくては……」

と強く思いました。

ケサをむかえると、旅館を医院になおし、「聖・バルナバ医院」のかんばんをかけました。バルナバとは、「愛の家庭」という意味です。二階は、「なぐさめ館」と名づけ、ケサや千代子のへやになりました。

いよいよ、医者としての仕事が始まりました。この土地の医者は、ケサ一人なので、小学校の校医から警察の仕事まで、引き受けたのです。ケサがきて、一番喜んだのは、かん者たちでした。今までは、病気が重くなっても、どうすることもできませんでした。

だから、どうせ死ぬのならと谷川に身を投げる人がたくさんおりました。生きる希望は、何一つなかったのです。お金は使い果たし、家に帰りたくても家族はいい顔をしません。汽車に乗ろうとしても、ライかん者とわかれば乗せてもらえ